

イエス・キリストの正体

気の触れたイエスの実像

2013・11・18

ヨセフス著「ユダヤ戦記」 6巻 301～302

「しかし、これらの兆しよりももっと恐ろしかったのは次のものだった。戦争が起る四年前(六二年の秋)、都が平和と繁栄をとくに謳歌していたときのことである。

アナニアスの子イエスと呼ばれるどこにでもいる田舎者が祭にやってくるとこの祭では神のために仮庵をつくるのが全ユダヤ人の慣習だった一神殿の中で、突然、大声で、「東からの声、西からの声、四つの風からの声！ エルサレムと聖所を告発する声、花婿と花嫁を告発する声、すべての民を告発する声！」と叫びはじめた。

そしてイエスは日夜こう叫びながら、路地という路地を歩いてまわった。市民の中のその名の知られた者たちは、これらの不吉な言葉に苛立ち、この者を捕まえると何度も鞭打って懲らしめた。しかしイエスは自分のために弁解するわけでもなく、また自分を鞭打った者たちに密かに解き明かすわけでもなく、それまでと同じように大きな叫び声を上げつづけた。

そこで指導者たちは、事実そうだったのだが、ダイモニオン(擬人化された悪霊)か何かに憑かれていると考えて、イエスをローマ総督のもとへ引き出した。彼はそこで骨の髄まで鞭打たれたが、憐れみを乞うわけでも涙を流すわけでもなく、ただひどく悲しみに打ち震える調子で、鞭打たれるたびに、「エルサレムに呪いを！」と言った。

アルピノスが「彼は総督だった(アルピノスは六二―六四年まで総督)」「いったいおまえは何者で、どこからやって来たのだ。何のためにこんなことを口にするのか」と尋問しても、それには答えず、都を呪う言葉を繰り返すだけだった。結局アルピノスは、気が触れていると宣告して男を放免した。

以後この男は戦争の勃発まで、市民に接触することはなく、また話しているのを目撃されることもなく、毎日祈りでも唱えるかのように、「エルサレムに呪いを！」と悲しみの言葉を繰り返していた。イエスは連日自分を鞭打つ者を呪いもせず、また食べ物を恵んでくれる者を祝福もしなかった。男はすべての人にあの薄気味悪い呪いの言葉を口にするだけだった。

とくに祭ともなれば、一段と声を張り上げて叫んだ。こうしてイエスは七年と五か月、相変わらずの調子で、倦むことなく嘆きの声を上げつづけた。

しかし、都が包囲されて呪いの言葉が成就されたのを見ると安息を得た。というのも、そのときイエスは周囲を巡回しながら城壁から「都と民と聖所に再び呪いを！」と甲高い声を上げていたが、最後に「そしてわたしにも呪いを！」と口にしたとき、投石機から発射された石弾が命中して即死したからである。こうしてイエスは、呪いの言葉をまだ口の端にのせながら、その命を解き放ったのである。」

上記ヨセフスの一文には、至る所に「共観福音書」に記載されている主テーマが秘匿されている。

1. 上記一文の全体像は「身内の者たちはこの事を聞いて、イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである」(マルコによる福音書 3:21 に符合)。
特に重要なのは下記箇所である。
 2. 「エルサレムと聖所を告発する声、花婿と花嫁を告発する声、すべての民を告発する声！」(洗礼者ヨハネがヘロデ・アンティパスの結婚を告発した事等他。マタイによる福音書 14:1-13 に符合)
 3. 「いったいおまえは何者で、どこからやって来たのだ。何のためにこんなことを口にするのか」(権威の論争 マルコによる福音書 11:27-33 に符合)
 4. 「最後に「そしてわたしにも呪いを！」と口にしたとき、投石機から発射された石弾が命中して即死したからである」(イエスは磔刑ではなく、石打の責め苦で殺されたのだ。これは私(新村)の確信)
 5. 「こうしてイエスは、呪いの言葉をまだ口の端にのせながら、その命を解き放ったのである」(「主よ、主よ。なんで私を見捨てるのですか」 マルコによる福音書 15:34 に符合)
- 蓋し、上記「気の触れたイエスの実像」を、教祖の「洗礼者ヨハネ」に投写し、「洗礼者ヨハネ」の上に、この「気の触れたイエスの実像」を「塗油」して、背教徒パウロがペテロとマルコをたぶらかし、イエス・キリスト教なるエセ宗教を立教したのである。「洗礼者ヨハネ」が開教したキリスト教を背教徒パウロが乗っ取った様なのだ。前回、聖書の正体『燐・han』IIIで、「気の触れたイエスの実像」を紹介しましたが、この(上記の)イエスしか「共観福音書」に符合するイエスは存在しない。正しくは、「気の触れたイエスの実像」=「本物のキリスト」=「洗礼者ヨハネ」である。
- 註 尚、聖書の正体『燐・han』IVもご併読下さい。本稿については追って論攷。

根絶 六大差別

宗教・人種・文明・制度・職業・貧富

日本義塾 主宰 新村紘宇二